

中国語補語構文記述の課題

馮 蘊 澤

1. 対象と目的

本論文の対象は中国語の「補語構文」と呼ばれる構文である。現在の理論的枠組みのなかで、当該構文の構築プロセスについて適切な説明を与えることを目指す。補語構文とは、次に示すように、従来、「補語成分」と呼ばれる成分が含まれる構文を指すもので、ある種の意味または形式的特徴によって、いくつかの類型に下位分類されている。ここで取り上げるのは、一般的に「様態補語構文」、「方向補語構文」、「結果補語構文」と呼ばれる次のような構文である。¹⁾

(1) i . 様態補語構文

他讲故事讲得 [小孩儿入了迷]。

ii . 結果補語構文

- a. 他削铅笔削 [破了] 手。
- b. 孩子听故事听 [入了迷]。
- c. 小猫病 [死了]。
- d. 我记 [住了] 单词。

iii . 方向補語構文

- a. 他推 [进] 院子里来一辆自行车。
- b. 他放 [在] 桌子上一本书。

本稿は、今後予定されている補語構文分析の一部で、その導入に当る部分である。ここでは、当該テーマの研究における現在の課題を提起し、本研究が依拠する理論的

1) これら三つの類型以外に、「可能補語」、「数量補語」を補語構文とする考え方(刘・潘・故 1983)や、さらに「到」を用いる補語、「程度補語」を加える考え方(朱 1995)などがあるが、ここでは同一の構造形式を有すると思われる上記の三つの類型だけを対象とする。

枠組みと、今後行う提案の輪郭を提示するのが目的である。

上に示した補語構文の種類と名称は、従来の標準的な中国語文法で用いられてきたものである。議論の冒頭に当たって、ここでは当面これを踏襲したほうが便利であるとする考えから、そのまま用いることにした。ただし、従来の研究で上記のように、補語構文を「様態」、「結果」、及び「方向」といった類型に下位分類しているものの、その根拠については必ずしも明確ではない点について指摘しておきたい。類型を示す名称からすると、構文の構造形式に基づくものというよりも、補語成分が表している「意味」に基づくものかのように思われる。他方、iの「様態補語構文」については、その表層構造に存在する構造助詞「得」の特徴をとらえて、「得」構文と呼ばれることもある。²⁾ このことから、こうした下位分類は単純に補語成分の意味特徴に基づくものとして片付けられない事情があることが窺える。いずれにしても、従来の分析では、上記の下位分類の問題をはじめ、さらに補語構文の定義自身に関しても、必ずしも明確とは言えず、ある種の暗黙の了解に近いものであることを指摘しておきたい。

本稿は、補語構文は、より抽象的な構造表示レベルでは、すべて同一の構造形式を持つ構文であり、他の構文と区別する独自の構造上の特徴をもって定義される構文であると考ええる。また、補語構文に含まれる補語成分の意味についても、たとえ表層の線形構造形式でそれがどのような形式で実現されるにしろ、共通の意味特徴（あるいは意味役割）を持つものとし、それゆえ、補語構文は共通して「補語構文」であると考ええる。現在の、上記のような「様態」、「結果」、「方向」といった下位分類は表層の線形構造形式を対象とした分類の結果で、あくまで表面的な現象である。こうした表面的な現象は、たとえば同一指示成分の消去という表層の線形構造上の制約や、あるいは語用論的要請による語順の移動など、表層の構造形式における変形の結果であって、構文構造の本質的違いを示すものではない。

他方、結果補語構文の構造的同一性、及び補語成分の意味的共通性は、構文内部の意味関係を正確に示すことのできるより抽象的な構造形式において初めて確認されるものである。本稿の分析はこのように、まず述語動詞に関わる構文成分の意味関係を手がかりに、表面的な現象を取り除き、構文内部の意味関係を正しく示す構造表示を追求する。抽象的な構造表示における補語構文の構造的同一性、及び補語成分の意味的同一性を示す。その上で、表層の線形構造における統語関係、意味関係表示の制約、及び語用論的諸要請を検討し、こうした表層的要素の働きによって同一の構文構造が表層上それぞれ違う形式で実現するプロセスを明らかにする。

2) 李臨定 1993 は、様態や程度といった意味による命名は、「得」を用いる補語構文の意味特徴を十分説明できないとして、こうした形式を持つ補語構文をまとめて「得」字補語文と呼んでいる。

生成文法に代表される現在の言語学理論は、言語事実、言語現象の整理と羅列を中心とする従来の文法観から一歩進み、より正確に言語の意味内容を表すことができ、的確に、合理的に言語現象をとらえて、説明できる抽象的な構造形式を提唱することによって、言語話者が内的に持っていると思われる構文構築能力、すなわち適格な文のみを構築し、不適格な文を排除するという言語に関する知識、あるいは言語能力の説明を目指してきた。本稿が目指す構文構築の仕組みまたはプロセスの説明というのもこうした目標に共感するものである。

表層の構文形式の実現は、意味構造自身、または形式構造自身、あるいは意味構造が形式構造へと実現する過程、さらに形式構造では深層構造（基本形式）から表層形式へと移行する過程など、さまざまな要因が関与し、作用するものである。従って、表層構造の異同は直ちに構文構造の異同を意味するものではない。同一の構文構造でも、表層におけるさまざまな制約などの影響や作用により、異なる表像として現れることもあれば、異なる構文構造が同じく表層的要因によって、同一の構造形式として現れることもある。構文の構造はこのように意味構造、深層の形式構造、及び表層の形式構造へと実現する過程を記述することで解明されるものである。この点、補語構文に関しても例外ではない。本稿が目指す構文プロセスとは、最終的には、こうした理論的枠組みのなかで、文の意味構造がいかにして形式構造へと実現するかというプロセスについて説明することである。このため、構文の記述には、構文の形式に関する情報を示す「形式構造」のほかに、述語動詞を中心とし、意味成分の数、類型、および統語成分と意味成分の間の対応関係に関する情報からなる「意味構造」、及び意味構造から形式構造への実現、さらに形式構造の深層から表層へと実現する各過程が含まれる。以下の第2節では、とりあえずこれらの諸要素について簡単に述べておくことにする。

2. 構文構築プロセス記述の要件

2.1. 統語構造

構文構築プロセスの説明に当たって、前提として解明しなければならない要素の一つは統語構造の形式である。いうまでもなく、言語にはその言語固有の統語構造形式に関する規定がある、統語構造の形式に違反する構文は文法的に非文となる。次の2つの中国語文の内、aは適格な文で、bは不適格な文である。bが不適格な理由は中国語の構造形式に関する規定に違反しているからである。

(2) 他打球打得很累。

* 打累很他球打得。

文は最終的には語が一行に並べられた線形形式として実現される。ところが、言語話者にとって「同一の文」と認識する構文でも、表層のレベルでは必ずしもいつも同一の線形構造形式で実現しないことはしばしばある。次は同じ状態補語構文と呼ばれる文である、明らかに、互いは線形構造形式の異なる文である。

(3) 他弹琴弹得我睡不着觉。

洗衣服洗得他很累。

他睡得很晚。

さらに、「意味的に同一の文」と思われるものでさえ、表面的には異なるいくつかの形式で実現されることがある。次の各文は同じだと思われる意味内容を表す文で、言語話者の主観では同一の構文である、にもかかわらず、構造形式から見た場合、それぞれが異なる文である。

(4) 他洗那堆衣服洗得腰酸腿疼。

洗那堆衣服洗得他腰酸腿疼。

那堆衣服洗得他腰酸腿疼。

このような文はいわゆる「同義異形文」である。

上記の同義異形文とは反対に、次のように、同一の構文形式に二つ以上の意味内容が読み取れる場合もある。つまり「異議同形」文である。

(5) 那个小孩追得我上气不接下气。

a. 那个小孩追我，我上气不接下气。

b. 我追那个小孩，我上气不接下气。

統語構造の記述は、こうした事実を単に羅列して終わるのでは明らかに不十分である。上の例が示した意味的同一性と構造形式の相違性、あるいは意味的相違性と構造的同一性の理由を、構造形式に求めることが可能か否か、可能であればどのように表示されるかについても合わせて明らかにする必要がある。

このような同義異形文間の内的関連性、あるいは異義同形文間の内的相違性を示し、さらにその理由を明らかにするためには、文の意味に基づいて構造形式の抽象化を行い、意味に即した構造表示を仮定するのが有効である。こうした抽象的な記述レベルを仮定することによって、同義異形文の奥に隠されている構造的同一性の真実、あるいは異義同形文の奥に隠されている構造的相違性の真実が明示的に示されることにな

る。また、同義異形文が表層構造で異なる形式として実現される理由およびその変形の過程と、異義同形文が表層構造上同一の構造形式として実現する理由およびその変形の過程も自ずと明らかになり、明示的に示すことが可能とある。

ところで、意味に基づく構造形式の抽象化にあたって、線形構造形式だけの抽象化では説明できない言語現象がある。次は構文成分の結びつきに親疎関係があることを示す例である。

(6) 这是 [我的书]。
[我的书] 是这个。

(7) 他经常 [给我] 写信。
他经常写信 [给我]。

(6) の例は名詞句「书」の移動にはその修飾語の「我的」も連動することを示すもので、(7) の例は名詞句「我」の異同には前置詞「给」も連動することを示すものである。つまり、「我的」と「书」は一つの構成素を成し、「给」と「我」が一つの構成素を成していることを示している。このことはすなわち、文は語が互いに均等な形一列に並んでいるものではなく、語と語が結びつき構成素を作り、構成素がさらに結びついて文を作るという「階層構造」になっていることを示している。従って、文の形式構造の記述はこうした階層的な構造形式、すなわち「構成素構造」を正確にとらえ、表示する必要がある。構成素構造は言語に関する重要な事実の一つである。このような構成素構造表示があつてはじめて説明される言語事実は多々ある。

このように考えると、文の線形構造自体も本来は一種の表面的な現象に過ぎない。線形構造実現の理由も構成素構造に求めなければならず、構成素構造表示は線形構造実現の根拠を提示するものであることが分かる。

2.2. 意味構造、統語成分と意味役割の対応関係

上の節では文の形式構造について述べてきた。しかし、統語構造形式さえ適切であれば、すべて「正しい」と思われる文が構築されるとは限らない。文には形式構造の他に、意味に関する制約もある。

次の2文は形式上いずれも正しい文である。しかし、意味的完結性に関していずれも欠陥がある文である。

(8) a. ? 他放在了桌子上。
b. ? 他放了一本书。

これら2つの文を次のように、意味的に必要と思われる成分を補足することで初めて完結性のある文となる。

(9) 他放在了桌子上—本书。

意味に関する制約の中に、上記の例が示す意味的完結性に関するものがある。意味的完結性を規定するのは述語動詞の「項構造」と呼ばれる規定である。つまり、動詞にはそれぞれ最小限満足させなければならない意味成分の種類と数に関する規定があると思われる。こうした必要不可欠な成分のことが「項」と呼ばれ、項と動詞の間で一定の意味関係で結びつけられて、このような意味構造が「項構造」である。文の意味的完結性とは、こうした項が過不足なく満足されていることである。動詞が要求する項が満足されない場合、上記のような意味的完結性に欠ける構文となる。

意味に関する制約のもう一つは、統語成分と意味成分の対応関係である。次の2文はいずれも統語構造として正しい形式であるが、bの方には意味上の欠陥がある。

(10) a. 他打球打得很累。

b. ? 球打他打的很累。

動作動詞を述語とする標準的な中国語の構文では、形式構成成分である「主語」は意味成分の「動作主」に、形式構成成分である「目的語」は意味成分の「被動作者」(あるいは「対象」)に対応するのが一般的で、正しい構文と認識される。上の文では、aはこのような規定に適合しており、正しい構文と認識されるのに対して、bの構文はこのような規定に違反しているため、意味的に非文である。

従って、構文構築プロセスの解明には、形式構造の他に、意味的完結性に関する規定と、形式成分と意味役割の対応関係に関する規定があることが分かる。

もちろん、文は述語動詞とそれが要求する項だけで出来るのはむしろまれで、多くの場合、項以外の付加的情報が含まれている。項と項以外の付加的情報を表す付加詞が一緒になって述語動詞の従属成分となって、述語動詞との間で一定の意味関係で結びつけられて、その文の意味構造を形成するのである。

意味的完結性は、述語となる動詞とそれが要求する項からなる項構造によって保障されるものであると述べた。こうした情報は辞書的内容として言語話者が言語に関する知識の一部であるレキシコンの中に最初から記載されていると思われる。つまり、その言語についての知識を持っているということは、各々の動詞が要求する項の種類と数に関する知識を「知っている」ということになる。また、項を含め、言語話者がある文を発するとき、表そうとする意味によって、項以外のどんな意味成分が必要か、

それが述語動詞とどのように意味関係を成しているかについても知っているはずである。さらに、意味成分と形式成分の対応関係についての情報も、言語話者が持つ項構造、あるいは広く意味構造に関する知識の一部であると考えられる。意味構造に含まれる意味成分はこうした対応関係の規定に基づいて統語構造において正確に自らの位置を見つけ、意味構造が統語構造として実現していくものと考えられる。

2.3. 構文構築の仕組みに関する仮説

以上述べてきたことを総合すると、適切な文の構築には、文に関する4つの情報が必要である。一つは統語構造の形式に関する情報で、もう一つは意味の完結性に関する情報である。そして、三つ目は項を含めたすべての意味成分と述語動詞の意味関係に関する意味構造の情報で、四つ目は、統語成分と意味成分の対応関係に関する情報、及び意味成分がいかにして正しく統語構造に実現されるかという構造実現のプロセスに関する情報である。正しい統語構造に、意味役割が正確に対応し、かつ意味的に完結性があるのはじめて、文法的にも、意味的にも適切な文と認められる。次の文はそのような文である。

(11) N + V + N

| | | | |
|-----|----|-----|------|
| 主語 | 述語 | 目的語 | 統語構造 |
| 動作主 | | 対象 | 意味役割 |
| 张三 | 看 | 书。 | |

他方、表層の統語構造の形式は多種多様である。このような多種多様な構造形式に含まれる統語成分の一つ一つに対して意味役割を指定するのは、理論的に可能であっても、現実的には想像を絶する膨大な作業であり、現実的には極めて困難なことである。また、言語習得の事実からしても、こうした個別の指定作業は必ずしも人間が持つ言語知識の真実を反映しているとは考えられない。

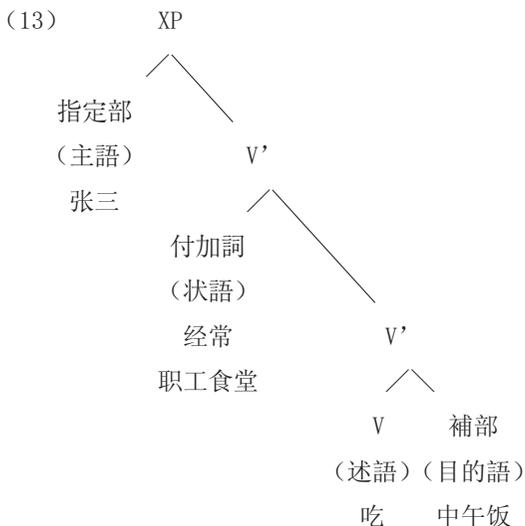
大きく「生成文法」として括られる現在の統語理論は、幾度のモデルチェンジを経て大きく進展し、構文の形式構造、意味構造、および統語成分と意味成分の対応関係について興味深い提案を提示してきた。こうした提案は、本稿が目標とする課題に対して、期せずにして有益な示唆を示している。こうした理論的枠組みに、旧来の観点で十分に説明できない中国語の補語構文の事実を照らしてみると、個別の言語の事実が無理なく説明できるようになると同時に、理論に対する検証にもなるので、こうした理論のもとでの分析をわざわざ避ける理由は見当たらない。以下、こうした理論的枠組みについて簡単に振り返ってみることにする。

構文に関する規定には、大きく形式構造と意味構造がある。意味構造にはさらに意

味の完結性に関する項構造と、付加詞成分、さらに意味成分と形式成分の対応関係を定める規定が含まれる。次のように整理することができる。

- (12) 1) 形式構造
 2) 意味構造
 a. 項、付加詞
 b. 意味成分と形式成分の対応関係

まず、形式構造について、句構造はその範疇が如何にかかわらず、互いに類似していることが観察されているため、従来の動詞句、名詞句の別をなくし、すべての句構造がカバーされる XP 構造が提案されている。それぞれの句には、中心となる要素である主要部 (X) が含まれ、主要部はその句全体の性質を決定する。主要部が動詞であれば句全体が動詞句となり、主要部が名詞であれば、句全体も名詞句となる。主要部以外の要素は補部と指定部、及び付加成分に区別され、主要部との関係が相対的に緊密で、同一の構成素を成すのが補部で、その外側に位置するのは指定部である。他に、動詞を修飾する副詞成分や名詞を修飾する形容詞成分などは「付加詞」として位置づけられる。なお、線形構造上、指定部は「主語」として、「補部」は目的語として実現される。付加詞は、中国語の場合、状語や補語として実現されるものと思われる。形式成分に指定部、補部、付加詞に区別されるのは言語の共通した原理で、他方、補部、指定部、および付加詞の句構造内部における位置関係は言語によって異なり、いわゆるパラメータである。中国語の主語、述語、状語を含む動詞句を例にして、おおよそ次のように示すことができる。



他方、文の意味的完結性、および統語成分と意味役割の対応関係は、語彙項目の情報として最初からレキシコンに記載されているものと考えられる。文は述語となる動詞があって初めて成立する。項と述語動詞の間はもちろん、付加詞と述語動詞の間の意味関係が確立して初めて意味構造が形成される。述語動詞との意味関係が確立されていない「张三」と「中午饭」は単なる関連性のない二つの名詞句である。「吃」という動詞があって、「张三」と述語動詞の意味関係と、「中午饭」と述語動詞の意味関係が確立されてはじめて、述語動詞「吃」を軸とし、「张三」と「中午饭」が関連成分とする意味単位が成立する。意味単位は概念的に次のように示すことができる。

- (14) $\left\{ \begin{array}{l} \text{张三} <\text{動作主}> \\ \text{吃} \\ \text{中午饭} <\text{対象}> \end{array} \right.$

文の意味的完結性および統語成分と意味役割の対応関係は、述語となる動詞の性格によって決定されるもので、同一ではない。

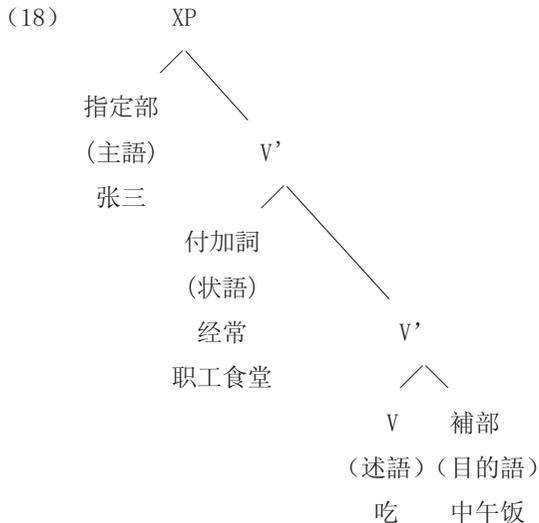
動詞の語彙項目に関する情報には、まず、述語として要求する「項」の数と類型が含まれている。これらの項となる成分が過不足なく意味単位（意味上の文）に組み込まれていれば、言語話者にとって「完結性」のある文となる。逆は完結性のない文と認識される。次のcに比べて、aとbはいずれも述語動詞が要求する項が十分満足されず、よって、意味的に不完全な文である。

- (15) a. ? [张三] 给了 [一枝笔]。
 b. ? [张三] 给了 [李四]。
 c. [张三] 给了 [李四] [一枝笔]。

他方、形式成分と意味役割の対応関係は、意味構造に含まれる意味成分である「項」や付加詞自身が持つ情報であると考えられ、意味成分の意味役割によって予測されるもので、意味構造の情報の一つとして各々の意味成分に記載されるものと考えられる。形式成分への実現もこのような対応関係の情報に基づいて自動的に決められるものと考えられている。「項」はまたそれ自身の述語動詞との意味関係によって、最初から「内項」と「外項」の区別があり、レキシコンのなかですでにレッテルが貼り付けられているものと考えられる。たとえば、動作動詞の<動作主>という意味成分は外項であり、<対象>は内項である。付加詞は付加成分の位置に指定される。概念的に意味構造を示すと、次のようになる。

- (17) 吃 { 张三 <動作主> 外項 → (指定部)
 经常 <頻度> 付加詞 → (付加詞)
 职工食堂 <場所> 付加詞 → (付加詞)
 中午饭 <対象> 内項 → (補部)

述語動詞は、意味構造に記されている上記の形式成分と意味成分の対応関係に基づいて、それ自身が持つそれぞれの項が内項であるか外項であるか、あるいは付加詞であるかという意味構造上の性格によって、形式構造上の形式成分に対してその位置を指定（意味役割指定）するのである。外項は形式成分の指定部に指定され、内項は補部に指定され、付加詞は、付加成分に指定される。こうしたプロセスを概念的に示すと、次のようになる。



上の構成素構造表示は形式構造のもっとも基本的な形式である。標準的な線形構造形式における構文成分の基本的な位置（つまり語順）はこうして決定されるものと思われる。このような構造形式を仮定しない限り、線形構造における語順の問題をはじめ、形式成分と意味成分の対応関係など、さまざまな言語事実の説明は困難であろう。

ただし、上記のような構成素構造形式はあくまで形式構造の基本的なもので、また、操作の対象となるのはあくまで述語動詞の意味成分となる成分のみである。ここには線形構造に現れる機能語は含まれていない。線形構造へと実現する過程で、線形構造における意味役割表示の必要性から、前置詞や助詞が添付されたり、また、同じ線形構造上の制約によって、同一指示成分の消去や、構文成分の移動が行われたりすることもある。さらに、語用論などの要請によって語順に変動が生じることもある。従っ

て、構成素構造は構造表示としてまだ抽象的で、「深層構造」に相当するものである。このような深層構造から、線形構造制約や、語用論的要請に従って変形が行われる実際の構文形式が表層の線形構造である。

3. 補語構文の課題

補語構文の分析も含めて、伝統的な構文分析は表面の構造形式を唯一対象とする。表面の構造形式の現象をできるだけ集め、集められた現象を一定の基準に基づいて分類し、分類の結果を並べて示すのに留まるのが一般的である。こうした分析は、言語事実の説明に限界があり、構文構築のプロセスの説明にもほとんど寄与しない。この節ではこうした問題点について観察する。

3.1. 補語構文の構造的同一性について

冒頭に示した「様態補語文」、「結果補語文」、「方向補語文」は表層の構造形式としてそれぞれ異なる構文形式である、にもかかわらず、ともに補語構文として分類される。補語構文とはこのように、表層の線形構造において「補語成分」が含まれているが故に「補語構文」と定義されるのである。しかし、表層の構造形式を見る限り、いわゆる補語成分の定義は必ずしも同一ではないことが分かる。次の例を観察することにして、[]のなかはいわゆる補語成分と呼ばれる成分である。

(19) i. 様態補語構文

他讲故事讲得 [小孩儿入了迷]。

ii. 結果補語構文

- a. 他削铅笔削 [破了] 手。
- b. 孩子听故事听 [入了] 迷。
- c. 小猫病 [死了]。
- d. 我记 [住了] 单词。

iii. 方向補語構文

- a. 他推 [进] 院子里来一辆自行车。
- b. 他放 [在] 桌子上一本书。

i の様態補語構文では、補語は主語や目的語と同様、述語動詞以外の統語成分で、構成素（「小孩儿入了迷」）であるのに対して、ii の「結果補語文」、iii の「方向結果文」では、補語は複合形式の述語動詞のなかの一部（「～破了」、「～进」）を指している。従っ

て、補語とはなにか、表層の構造形式から見る限り、定義は一つではないように見える。

しかし、実際のところ、これらの構文形式とともに「補語構文」としていること自体、すでに抽象化の視点が含まれており、表層の構造形式を超えて、表層では見ることのできない抽象的な構造形式を対象にしている。深層にあるこれらの構造形式の共通性を意識し、ある種の抽象的な構造形式を対象にして分析した結果である。問題は、伝統的な分析はこうした深層のある構造的同一性を意識し、ある種の暗黙の了解のもとで構文分類に用いているにもかかわらず、構造表示においてあくまで表層のありのままの構造形式にこだわり、こうした抽象的な構造形式を明示しようとなない結果、せつかくの構造的同一性も見えてこない理由である。

詳細はこの後の節で述べることにするが、表層の構造形式の背後に隠されている抽象的な構造形式とは、述語動詞とその従属成分の意味関係に基づいて、意味的に存在する成分を忠実に復元することによって得られる文の本来の意味を正しく表す構造形式のことである。上の例を用いて表示すると、次のようになる。(括弧のなかはいわゆる意味的に実在しながら表層に現れず、意味関係に基づいて復元される意味成分である。「得」などの機能語は予測可能な要素で、表層構造において添加されるものと考え、深層の構造形式に含まれていない。紙幅の関係で、復元の詳細は他の機会に譲る。)

(20) i. 様態補語構文

他 + 讲故事 + 讲 + 小孩儿 + 入了迷

ii. 結果補語構文

他 + 削 + 铅笔 + 削 + 手 + 破了

孩子 + 听 + 故事 + 听 + (孩子) + 入了 + 迷

小猫 + 病 + (-) + 病 + (小猫) + 死了

我 + 记 + 单词 + 记 + (单词) + 记住了

iii. 方向補語構文

他 + (推) + (自行车) + 推 + 自行车 + 进 + 院子里来

他 + (放) + (书) + 放 + 书 + 在 + 桌子上

上のような抽象的な構造表示で分かるように、構造形式上補語構文とは、反復される主要動詞によって連結される二つの文構成素からなる構文のことである。二つの文構成素をそれぞれ S1、S2 として表示すれば、補語構文は統一して形式的に次のように示すことができる。

(22) [[N1+V1+N2]_{s1}+[V1+[N3+V2+(N4)]_{s2}]]

そして、いわゆる「補語成分」についても、共通して、反復された主要動詞に後続して現れる文構成素のことであると定義することができる。

(23) [[N1+V1+N2]_{s1}+[V1+[N3+V2+(N4)]_{s2}]]

主語 目的語 補語

このように、補語構文、補語成分とは、事実上表層の構造形式に隠されている抽象的な構造形式に基づいて分析された結果である。このため、補語成分および補語構文の構造的同一性、類似性も、意味的に存在する意味成分をすべて補足して得られる抽象的な構造表示があって初めて明示的に示すことができる。なお、一部の意味成分は意味上存在しながら、必ずしも表層構造に現れず、分析して復元しないとその存在が見えない理由、あるいは、意味成分が必ずしも通常的位置におかれていない理由などについては、先の節でもふれたように、同一指示成分の消去という表層の線形構造における制約の結果、または語用論などの要請によって移動が行われた結果である。

3.2. 補語成分の意味について

表層構造に見る「補語成分」は、これまで見てきたように、意味的に実在する要素が一部省略されることがあるため、文構成素として現れることもあれば、単一の動詞として顕現する場合もある。表層構造に基づく従来の分析では、表層の構造形式だけが対象となることによって、補語成分の意味についての解釈も表面に現れている要素だけが対象となる。その結果、補語成分の「意味」をとらえる共通の基準は存在せず、即物的で、補語成分の意味は表層構造の形式、表面の残る成分の異同によってさまざま、一貫性が見られない。表層の補語成分の意味を確認するため、「様態」、「結果」、「方向」の例をもう一度見ることにしよう。

(24) i. 様態補語構文

他讲故事讲得 [小孩儿入了迷]。

様態

ii. 結果補語構文

他削铅笔削 [破了] 手。

結果

iii. 方向補語構文

a. 他推[進]院子里来一辆自行车。

方向

上の例から、三種類の補語構文の「意味」は事実上それぞれ次のような異なる視点でとらえられていることが分かる。

まず、「様態補語構文」では、補語成分は述語動詞を含む構成素（「小孩儿入了迷」）によって担われている。構成素自体は一種の「様態」を表すので、「様態補語」とされる。このような補語成分を含む構文も「様態補語構文」となる。言い換えれば、様態補語構文に含まれる補語成分の意味とされる「様態」とは、当該成分と他の成分、たとえば述語動詞との間の意味関係ではなく、むしろ補語成分自身の意味特徴を指すものである。つまり、補語成分が表しているのは、名称でもなければ、動作、行為でもなく、「様態」である故、様態補語構文なのである。

これに対して、「結果補語」の補語成分とされる V2（あるいは C）「破」の意味が「結果」である理由は、「破」自身に関する意味特徴ではなく、この成分と述語動詞の間の意味関係を指している。つまり、V2 が表しているのは同じく一種の「状態」であるにも関わらず、「結果」として定義づけられるのは、V2 が表している状態は主要動詞（V1）が表す動作、行為、あるいは状態が引き起こす「結果」であるが故に、「結果補語」なのである。

次に、同じく単独の動詞形式として現れる「方向補語」における補語成分については、これを担う動詞自身が表しているのはある種の動作や状態であるが、それが「方向」として定義づけられているのは、様態補語構文の場合のように、名称や、動作、あるいは方向といった補語成分自身の意味特徴でもなければ、結果補語成分の場合のように、補語成分と主要動詞の間の意味関係でもない。むしろ主要動詞が表す意味を補足するもので、言い換えれば、主要動詞が表す「移動」が向かう「方向」を補足しているものである。

以上述べてきたことを整理すると、次のようになる。つまり、表層構造の補語成分が表しているとされ、さらに補語構文の下位分類の根拠とされる補語成分の「意味」とは、それぞれ次のような異なる基準によって定義されているものである。

(25) 様態：補語成分を担う構成素自身の意味特徴。

結果：補語成分と主要動詞の間の意味関係。

方向：主要動詞自身が表す意味を補足しているもの。

このような表層構造形式から離れて、意味的に存在する成分を補足して、構文成分の意味関係及び文本来の意味を正確に示した抽象的構造表示では、補語成分の形式が一定であるうえ、その「意味」も一貫して同一の基準で定義することが可能となる。つまり、次の例が示すように、補語成分は一貫して文構成素のよって担われる、補語成分を担う文構成素と主要動詞との意味関係、意味役割の面から見れば、補語成分は意味上いずれも主要動詞の作用によって生じる「結果」として定義される。

(26) i. 様態補語構文

[他 + 讲故事] + 讲 + [小孩儿 + 入了迷]

| __ 結果 __ |

ii. 結果補語構文

[他 + 削 + 铅笔] + 削 + [手 + 破了]

| __ 結果 __ |

iii. 方向補語構文

[他 + 推 + 自行车] + 推 + [自行车 + 进 + 院子里来]

| __ 結果 __ |

3.3. 構文構築プロセスの説明について

文の適格性は形式と意味の両面から保障されるもので、形式的に適格な文でも、意味的に不適格であれば、正しい文とは認識されない。次の二つの文はいずれも「主語 + 状語 + 述語 + 目的語」の形式を持つ文で、形式上正しい文である。aの文の意味は正しく理解することが可能であるのに対して、bの意味を正確に理解することは困難な文である。

(27) a. 张三 + 在墙上 + 挂了 + 一幅画。

b. ?? 画 + 在墙上 + 挂了 + 一个张三。

従って、文に関する規定（文法）には、形式に関するものほかに、意味に関するものがあると考えられる。意味に関する規定にはさらに「意味の完結性」に関するものと、個々の構文成分の意味役割に関するものがある。次の2文は同じく形式上正しい文で、意味上欠陥のある文である。意味上の欠陥の理由は異なる。aは「意味の完結性」に関わる問題で、bは構文成分の意味役割に関するものである。

- (28) a. ?? 张三在墙上挂了。
 b. ?? 画在墙上挂了一个张三。

aの「意味の完結性」は意味構造の領域で定める問題だが、bの構文成分の意味役割の問題は、意味成分と形式成分の対応関係に関する問題で、形式構造の面から見れば、形式成分の意味役割指定の問題である。言い換えれば、表面の線形構造において、個々の形式成分の意味役割に関して一定の規定があり、これらの規定を無視した線形構造形式は意味的に不適格な文として認定される。

構文成分の意味役割指定を表面の線形構造を対象に行うことは、理論的に不可能ではないと思われる。上の例で示すと、次のように、述語動詞は別にして、主語に対しては<動作主>、目的語に対しては<被動作者>、状語に対しては<場所>のような意味役割指定に関する規定があれば、bのような意味的に不適格な文の生産は避けられる。

- (29) 主語 + 状語 + 述語 + 目的語

| | | | |
|-----|-------|----|------|
| | | | |
| 動作主 | 場所 | V | 被動作者 |
| | | | |
| 张三 | (在)墙上 | 挂了 | 一幅画。 |

しかし、問題は、表層の線形構造の形式は、理論的には無限に可能である。表層の線形構造における意味役割の配置も、多種多様であるうえ、「意味」の捉え方によって、指定が困難なケースも多々ある。本稿の対象となる補語構文の例で観察するだけでも、その一端を窺うことができよう。

- (30) a. 他 + 弾 + 琴 + 弹得 + 我 + 睡不着觉。
 b. 那堆衣服 + 洗得 + 他 + 腰酸腿疼。

まず、主要動詞の主語について見ると、aでは、主語は述語動詞の動作主を表し、目的語はその被動作者を表しているのに対して、bではむしろ正反対で、主語は述語動詞の被動作者で、目的語はその動作主を表している。次に、いわゆる補語とされるV2(つまりC)の動作主の現れ方について見ると、一層複雑である。

- (31) a. 他 + 洗 + 衣服 + 洗得 + 很累。
 b. 他 + 敲 + 门 + 敲得 + 咚咚响。
 c. 你 + 叫 + 我 + 叫得 + 真甜。

a では、V2 の動作主は主要動詞の主語に現れているのに対して、b では目的語に現れている。また、c ではその動作主を確認することすら不可能である。

さらに厄介なことは、表層の線形構造では次のような多義文（あいまい文）が存在することである。多義性の理由は、同一の形式成分に対立する別の意味役割が同時に指定することが可能だからである。

- (32) 那个小孩儿追得我上气不接下气。
 a. 那个小孩儿追我，我上气不接下气。
 b. 我追那个小孩儿，我上气不接下气。

つまり、表層の構造形式では、主語は動作主の指定を受けることも、被動作者の指定を受けることも許され、また、目的語も同様で、被動作者の指定を受けることも許されるのである。

これらの例だけでもわかるように、表層の線形構造における意味役割の配置は不安定で、一義的に指定することは困難である。可能なすべての表層構文形式を網羅し、一つずつ指定を行うほか方法はない。このような形での意味役割指定は、仮に理論的に可能であっても、どれだけの現実性があるか疑問である。

表層の線形構造に見られる構文成分の意味役割の多様性、不安定性に対して、意味関係を正確に示す深層の抽象的構造形式では、次に示すように、補語構文は大きく1つの構造形式であるうえ、構文成分の意味役割も安定していて、一義的に指定される。

- (33) a. 他 + 弹 + 琴 + 弹得 + 我 + 睡不着觉。
 b. (他) + 洗 + 那堆衣服 + 洗得 + 他 + 腰酸腿疼。

- (34) a. 他 + 洗 + 衣服 + 洗得 + (他) + 很累。
 b. 他 + 敲 + 门 + 敲得 + (门) + 咚咚响。
 c. 你 + 叫 + 我 + 叫得 + (一) + 真甜。

- (35) a. 那个小孩儿 + (追) + (我) + 追得 + 我 + 上气不接下气。
 b. (我) + (追) + 那个小孩儿 + 追得 + 我 + 上气不接下气。

助成を受けた調査研究の成果である。記して感謝の意を表したい。

参 考 文 献

- 刘月华・潘文娉・故韡 1983 : 『實用現代漢語語法』 外语教学与研究出版社
井上和子・原田かづ子・阿部泰明 1999 : 『生成言語学入門』 大修館書店
山口直人 1991 : 「動補動詞の類型と形成について」 『中国語学』 238
朱德熙 1995 : 『文法講義』 白帝社
秋山淳 1998 : 「語彙概念構造と動補複合動詞」 『中国語学』 245
石村広 2000 : 「中国語結果補語構文の意味構造とヴォイス」 『中国語学』 247
中村捷・金子義明・菊池 朗 1989 : 『生成文法の基礎』 研究社出版
町田茂 1991 : 「動詞—賓語—動詞—結果補語式の文法の意味——処置の“把” と非処置のV」 『中国語学』 238
町田茂 1992 : 「動詞—賓語—動詞+得—結果補語式の文法的な意味——処置の“把” と非処置のV」 『中国語学』 239
李臨定 1993 : 『中国語文法概論』 光生館
立石浩一 2001 : 『文の構造』 KENKYUSHU
馮蘊澤 2008 : 「中国語補語構文分析の表層と深層」 『語学教育フォーラム』 大東文化
大学語学教育研究所

現代漢語補語句描寫的課題

馮 蘊 澤

本文是筆者有關補語句描寫研究的第一部分。本文的目標是指出當前有關補語的描寫中的存在的問題，同時介紹現代語言學理論的基本框架，並概要地展示在現代語言學理論的框架下如何克服目前有關補語句描寫中存在的問題，通過結構分析，合理地說明補語句生成的基本程序等問題。本文分三個部分，首先闡述句子生成過程描寫所需要的基本程序。然後介紹補語句描寫所需要的語言學理論的基本框架。在此基礎上指出當前漢語補語研究中的問題以及在現代語言學理論的框架下如何解決這些問題的基本構想。本文認為，句子生成程序的描寫包括句子的形式結構，語意結構，形式成份與語意成份的對應關係的描寫，以及從語義結構到形式結構的生成過程等三大程序。同時，目前有關現代漢語補語句的描寫方面也存在著下列三個問題，即，補語句的結構同一性問題，補語句中補語成份語意功能的同一性問題、以及如何通過上述分析、最終解釋說明補語句生成的程序的最基本問題。關於補語句生成程序，本文認為，在語義結構的平面上，「狀態」、「結果」、「方向」三類補語句有著共同的結構形式，同時在形式結構的平面上，三類補語句也有著共同的結構形式。語義結構根據其內部包含的成份自身的信息、在形式結構上自動找到各自的位置，進而生成為基本句子結構形式，句子的基本結構形式又依據表面線型結構上語法關係，語義關係表達上的限制條件、以及語用論方面的要求，進行適當的調整，最後得到句子的表面形式。所謂「狀態」、「結果」，「方向」等補語句的不同形式實際上是同一個語義結構、形式結構。因內部所包含的通指成份的有無、通指關係的異同方面的不同而導致的表面線型結構形式的變形的不同所引起的表面形式的不同。

本文的目的是展示依據現代語言學理論解釋補語句生成程序的基本框架，各種補語句的詳細分析和說明還有待今後的其他機會。